

大串明弘作 「やみへのいざない」

< 前編 >

(回想)

- 子供1 こっくりさん、こっくりさん、1 円玉の中にお入りください。入ったらハイのほうにお進みください。
- 子供2 こっくりさん、こっくりさん、10円玉の中にお入りください。入ったらハイのほうにお進みください。
- 子供3 何だよ。入らないじゃん。10円玉の中に霊が入るなんて、絶対ウソだよ!
- 牧野綾 そんなことないわよ。わたしたちの霊感が足りないから、入ってこないのよ。霊感が強い人がいれば、2人でも“こっくりさん”できるんだけど、君じゃダメね。ね、里美、一緒にやらない?
- 小島里美 えー!? わたし、そういうの怖いの。
- 綾 大丈夫よ。里美だって未来のこととか知りたいでしょ? こっくりさんに聞けばみんな分かるんだから。さ、一緒に10円玉に人差し指を付けて...
- 子供1 こっくりさん、こっくりさん、10円玉の中にお入りください。入ったらハイのほうにお進みください
- 里美 あ! 10円玉が動いた!
- 子供3 ウソだよ! お前らが動かしているんだろ?
- 綾 そんなことないよ。わたし動かしてないわよ。
- 子供たち わたしも。わたしも。(口々に)
- 里美 こっくりさんが入ってる....
- 綾 里美って、霊感強いんじゃない?
- (音楽)ブリッジ(回想終わり)
- 里美ナレーション わたしの名は、小島里美。青春高校3年。わたしが初めて目に見えない霊の存在を知ったのは、小学校5年生の時だった。親友の牧野綾や、友達に誘われて、嫌々加わった“こっくりさん”で、10円玉が動かないとき、わたしたち以外の力がそれを動かしていると直感的に分かった。今思うと、それが目に見えない霊との関係の始まりだった。
- 店員 はい。お会計を先によろしいでしょうか? ご一緒に1,200円になります。
- ナレーション わたしは何気なくお釣りを出す店員さんの手のびらをみた。すると一瞬、その人のお母さんらしき人の葬儀の様子が見えた。
- 店員 ありがとうございます。ごゆっくりどうぞ。
- 里美 あ、失礼ですけど、最近身内に不幸はありませんでしたか?
- ナレーション そう言うと、店員さんの顔からさっきまでのさわやかな笑顔が消えた。

店員 どうしてそれを？

里美 もしかして、お母さんじゃないですか？

店員 (怒ったように)何でそんなこと、あなたが知ってるんですか！

ナレーション その人は先週、離婚して家を出た実の母親がなくなったことをひそかに知り、父親にも内緒で葬儀に出席したと言うのだ。

綾 里美、何してんの？ こっちこっち！

里美 あ、ごめんね。

綾 ねえ、あの人知ってんの？

里美 う、うん、ちょっとね。友達のお姉さん。

ナレーション わたしは、見ず知らずの人の過去を言い当てた驚きと戸惑いで、思わずウソをついてしまった。

里美モノローグ さっきのは偶然よね。人の過去が分かるなんて、そんなことあるわけないよ。

ナレーション そうは思いながらも、わたしは一瞬見えた鮮やかな光景を思い出し、それが当たっていたことを考えると、何だか怖くなった。

里美モノローグ もしかして、わたしにそういう能力があるのかも…。

綾 あれ？ これ男の人の財布じゃない？

ナレーション 綾がテーブルの下から財布を拾い上げた。それを見た瞬間、中年の男性の顔が見えた気がした。

里美 それ、あの子の。ほら、今マックに入ってきた人。

綾 え？

男 ああ、あった！ それ、わたしの財布です。よかったあ、見つかって。どうもありがとうございます。

綾 ねえ、何で分かったの？ この財布の持ち主があの人だって。

里美 わたしね、小学校の5年生ごろから、プールの更衣室とかに置いてある服を見て、その持ち主がだれかピンと来ることがよくあったんだ。

綾 ウソ！ それって超能力？ すごいじゃん。どうして今まで黙ってたの？

里美 うん、何か怖かったんだ。超能力って言うより、靈感って言うか、そんな気がして。

綾 でもすごいじゃん！ そんなの普通できないよ。それってテレビとか出られるんじゃない？ ねえねえ、じゃあちょっとわたしの手相見てよ。

ナレーション わたしは綾の手相を見た。そるとどうだろう！ 綾の過去や現在がスーッと分かってくるのだ！

里美 ねえ、綾、わたしに隠してることない？

綾 え？ 隠してることって、な、何のこと？

里美 綾、去年のバレンタインにわたしが好きな悟君にチョコ渡して告白したでしょ？

綾 ど、どうしてそんなこと分かるの？

ナレーション この日以来、綾が友達を初め知り合いという知り合いにまで、この手相の件を言いふらしてたお陰で、うわさを聞いているんな人がわたしを訪れるようになった。普通の人には分からないようなことが分かるという優越感や快感がわたしの中に芽生え、わたしはますますその力を使うようになっていったのだ。

里美の父 里美、今日会社の同僚から、お前のこと聞かれたぞ。何だか、お前の占い、よく当たるらしいじゃないか。あんなうちから離れたところまで伝わるなんて、うわさってすごいもんだな。

里美の母 わたしも聞くわよ、最近。里美も亡くなったおばあちゃんみたいに、易者さんになったら？ 結構おばあちゃんより当たったりして。

ナレーション そう、わたしの父方の祖母は、易者だったのだ。そう言えば、小さいころ、手相を見てもらったりした。わたしの予知能力は、ひょっとして何か関係があるのだろうか。

(効果音) (学校のチャイム)

綾 あーあ。やっと眠い眠い一日が終わったかぁ。ね、里美。帰りにマックしかない？

里美 うん、いいよ。

(効果音) (街の喧騒)

ナレーション わたしは、綾を待っている間、何気なく隣の公園で遊んでいる女の子を見ていた。

里美モノローグ あ、痛い!!

ナレーション 突然、足の付け根がキューンと痛み出した。

里美モノローグ あ、また…。

ナレーション わたしは、その公園の女の子が駆け出すたびに、痛みが襲ってくるのに気がついた。わたしは、その子のお母さんらしい人に近づいて、言った。

里美 あ、このこのお母さんですか？ お子さんのふとももの付け根に、何か病気がありそうですよ。バカげてるかもしれませんが、念のために病院に連れていってみてはいかがでしょう？

ナレーション 何日かして分かったことだが、半信半疑ながら母親は不安になって、その子を病院に連れていったところ、先天性の股関節脱臼で、ほうっておいたら歩けなくなるところだったとお医者さんに言われたそう。

綾 あ、里美。ごめん！ 彼から呼び出しがかっちゃって、行かなくちゃいけないの。

里美 あ、そうなの？ いいなぁ。わたしもだれかいい人できないかな。

綾 何でも分かるのに、そんなの自分で分からないの？ 自分が将来結婚する人とか。

里美 うん、過去や現在のことはよく分かるんだけど、未来のことはイマイチなのよ。外れることも結構あるし。

綾 ふーん。里美でも分かんないことがあるんだ。そうだよ。今日のテストの点も

悪かったみたいだから、テストの答えまでは分からなかったってことか。

里美 言ったなあ。もう、早く行きなよ。彼氏待ってるよ。

里美モノローグ 彼氏かあ。いいなあ。デモなんか最近顔つきが悪くなったとか、暗くなったって言われるし、こんなんじゃないってなっても彼氏なんてできないよ。

(効果音) (ドアの開閉音)

里美 ただいま。

里美の母 里美、ちょうどよかったわ。お客様がお見えになってますよ。

ナレーション それは知らない女の人だった。

里美 え? (モノローグ) あ、何あれ?

ナレーション 女の人^のの背後を見て、わたしはびっくりした。何とその人の後ろには、男とも女とも分からない3人^のの人の顔が、くっきりと見えるではないか。しかもその表情は、憎しみに満ちていて、見るからに恐ろしかった。

里美 あなた、3人^のの人から恨まれてますね?

女 え? ええ、そうなんです。

ナレーション その女性は、顔面蒼白^{そうはく}になって事情を話してくれた。

女 昨日から、息子が帰ってこないんです。警察にも行って、今捜してもらってるんですが、まだ見つからないんです。昨日の夕方、川辺で見かけたっていう情報も入っているんですが、実は商売上のことでいろいろあって、わたしをすごく恨んでいる人が3人いるので、無事でいるかどうかすごく心配で。これがその子の写真です。無事かどうかだけでも教えてください。

ナレーション わたしはその写真を見た瞬間、「この子は死んでる」と思った。

里美 あ、残念ですが、この子はもう死んでいます。写真に死相が漂ってますから。

女 そ、そんな…。(泣き崩れる)

ナレーション 頼まれるままに、その子が最後に目撃されたという川辺に行ってみると、わたしの足が勝手に歩き出し、川辺の、ある所でピタッと止まった。と同時に、「目が痛いよあ、目が痛いよあ」という声が聞こえた。

里美 その水のの中に、その子がいます。

ナレーション (音楽) (不気味な感じのBGM) 捜索の人々が水中を捜すと、果たして男の子の死体が発見された。そして、引き上げられた男の子の遺体は、明らかに目を傷めていたのだ。こうしてわたしの予知能力は、ますますエスカレートしていった。それと共に、わたしは、自分を縛り付ける見えないやみの力に、次第に恐怖を感じるようになっていった。

< 後編 >

(効果音) (電話のベル)

平岡牧師 (効果音) (フィルター音) もしもし、いのちの電話です。どうなさいましたか?

里美 わたし、怖いんです。怖くて夜もほとんど眠れないんです。どうしようもなくなって、お酒を飲んで忘れようとするのですが、できません。一体わたしはどうすればいいのでしょうか？

平岡牧師 (フィルター音) ああ、お苦しそうですね。で、何がそんなに怖いんですか？ よかったらお話ししていただけませんか？

里美 小学校のころ、“こっくりさん”をやって以来、わたしのうちに何か別の力を感じ始めていました。最初は服から持ち主が分かるという程度でしたが、それがだんだんエスカレートしていきました。高校3年になると、手相からその人の過去、現在、未来が分かったり、写真を見ただけでその人の病気や状態が分かるようになり、霊も見えるようになりました。家にはひっきりなしに人が訪ねてきて、わたしの力に頼ってきます。今までに1,000人ぐらいは見てきたでしょうか。でも、ほかの人の役には立っても、わたしはと言うと恐ろしくて夜も眠れないんです。

平岡牧師 (フィルター音) なぜ恐ろしいんですか？

里美 なぜって、一日中、だれかがわたしの後ろでわたしを見張っているんです。その存在がものすごく恐ろしくて、眠れないほどなのです。今では顔つきも悪くなり、暗くなっただけでみんなに言われます。

平岡牧師 (フィルター音) その力を使うのをやめようと思ったことはないのですか？

里美 もちろん何度もあります。この力のせいでわたしがこうなったのは明白ですから。でも、自分の力でやめるなんて絶対できません。例えばだれかに会うと、その人のことがスーッと分かります。でもそのことを相手に話さないと、内側から何か別の力がムラムラとわたしを圧迫して、ものすごく苦しくなって、いてもたってもいられなくなるんです。で、それを口に出すと、自分の中から力が抜けて楽になるんです。

平岡牧師 (フィルター音) そうですね。あなたはその力が何であるか分かりますか？

里美 いいえ、よくは分かりません。でもこんなことがありました。実はわたし、ずっと前に教会学校に行っていた時があったので、聖書を持っているんです。で、この前ふと懐かしくなり、長い間ホコリをかぶっていた聖書を取り出そうとしました。そうすると、わたしの心に激しいかっとうが起きました。聖書に手を伸ばすと、それを払いのけるような力を感じたんです。わたしは、体の中から突き上げてくる激しい力と戦ったのですが、とうとう負けてしまい、聖書を開くことができませんでした。その時、いつか案内で入っていた教会のチラシの“いのちの電話”のことをハッと思い出し、もうワラにもすがる気持ちで電話したんです。

平岡牧師 (フィルター音) 層ですか。それでは今日はもう遅いから、明日教会にいらっやいませんか？

里美 分かりました。

ナレーション その夜は、それまでになく苦しい夜だった。

(音楽) (怖い感じ) わたしをいつも見張っている存在が部屋に満ち、まるで大勢の殺気立った人たちに囲まれているような感じだった。わたしはあまりの恐ろしさに、思わず聖書を手に握り締めた。こうして布団の中で丸くなって、まんじりともせずに夜を明かしたわたしは、翌朝、十年ぶりに教会の門をくぐった。

(効果音) (小鳥のさえずり)

里美 こんにちは。あの、昨日電話をした者ですが、牧師さんはいらっしゃいますか？

平岡牧師 あ、ようこそいらっしゃいました。小島里美さんですね。牧師の平岡です。お待ちしましたよ。さあさあ中へどうぞ。

ナレーション 応接間に通されると、牧師の奥様もいて、優しくそうな顔で出迎えてくれた。

平岡牧師 小島さん、早速ですが、まず神様にお祈りしましょうね。

ナレーション そう言って、お二人はわたしの頭に手を置いて、神の助けと祝福を求めて祈り始めた。その時だった。わたしの内側で、あのやみの力が暴れ始め、再び激しい戦いが起こった。

里美 牧師先生！ わたしは2年間占いをやっていました。わたしはやみの力の虜になっているんです。このままでは殺されてしまいます！

平岡牧師 分かります。それは悪魔、サタンの力です。今、あなたの中で、サタンとの大きな戦いがあるんですね。でも大丈夫です。必ずイエス様が助け出してくれますから。サタンの手口は巧妙です。彼の誘惑は、一見正しそうで、非常に好ましいものです。そしてサタンに従って生き始めると、ある種の快感を与えます。どうですか、小島さん？ あなたも占いが当たって人を驚かせた時、優越感のようなものを感じませんでしたか？

里美 はい、最初は確かに楽しくて、非常な優越感を感じました。自分が人の心を支配できるみたいで。

牧師夫人 そしてだんだん深みにはまっていったんですね？

里美 そのとおりです。気がついたときには、もう自分は自分でなくなって、その力がわたしを思うままに支配しているのです。

平岡牧師 小島さんのおばあさんは、確か易者だったと言いましたね？ あるいは知らない間に、その影響を受けていたのかもしれないね。でも、聖書にはこう書いてあるんですよ。「あなたのうちに、占いをする者、卜者、まじない師、呪術者、呪文を唱える者、霊媒をする者、口寄せ、死人に伺いを立てる者があってはならない。これらのことを行う者は皆、主が忌み嫌われるからである。」あらゆる占いやオカルトは罪だから、離れよと神様は言われるんです。なぜだと思いませんか？

里美 ...何て言ってもいいか分かりませんが、サタンや悪霊と関係してくるからですか？

牧師夫人 そうですね。神様以外の超自然的な力にすぎるといことは、サタンに自分の心を明け渡しているようなものなのです。

平岡牧師 ですから、あなたは今すぐこれらのことをやめなければなりません。

里美 でも先生、そんなことは無理です。何度もやってみましたが、自分ではどうにもできません。

平岡牧師 ウン、確かにあなたにはできないかもしれない。ですが、心配しないでください。神様は何でもおできになります。今すぐにもサタンを滅ぼすことのできるお方です。あなたが、今までの行いを悔い改めて神様を信じて従うならば、神様はきっとあなたをサタンの力から救い出してくれますよ。

牧師夫人 そしてね、小島さん。あなたを心から愛して、あなたの自分中心や高ぶりの罪をすべて背負って死んでくださった神のみ子のイエス様は、よみがえって、今も生きておられるんです。このイエス様を信じて、心の中にお迎えしたら、もう大丈夫なのよ。あなたは独りじゃない。イエス様があなたの心をご支配くださって、どんなときにも守ってくださるんだから。

平岡牧師 小島さん。この方による以外に、救いはないのです。イエス様を、あなたの主と信じますか？

里美 はい、わたし... イエス様、...信じます。

ナレーション 牧師夫妻は、再びわたしの頭に手を置くと、感謝の祈りをしてくれた。そして祈りの中で、最後に力強くこう言ったのだ。

平岡牧師 サタンよ、我らの主、神のみ子イエス・キリストの名によって命ずる。小島里美さんから、永遠に出てゆけ!

ナレーション その瞬間、わたしの中で暴れていた力は消え去り、砂漠のように乾いたわたしの心から、希望の泉のようなものがわき出るのを感じた。そしてかつて感じたことのない平安で、わたしの心は満たされたのだ。

里美 モノローグ ああ神様。わたしを助けてくださって、ありがとうございます。今まであなたに背いて生きてきたことを赦してください。これからは、あなたがわたしを守ってください。

ナレーション その日が、占いと完全な決別の日となった。それ以来、わたしを見張っていた暗やみの存在は姿を消し、あの予知能力もなくなった。もう夜は怖くなかった。“イエス様が守っていてくださる”という喜びと安らぎのうちに、わたしはぐっすりと眠った。

(間・語調を改めて)わたしのような体験をした人は、そんなにいないかもしれませんが。でもわたしは、人の心はラジオのようなものだと思います。ひとたび人がオカルトや超能力の世界に興味を抱くとき、悪霊の周波数と合ってしまい、あの声が、底知れぬやみの世界にいざなう声が聞こえてくるのです。あなたの心のラジオは大丈夫ですか？

(完)